

中期朝鮮語における基礎語彙 ——身体語およびその関連語——

辻 星 児

朝鮮語の歴史において、1443年のハングル創制が画期的な出来事であったことは言を俟たない。この固有の文字の発明によって、さまざまな文献が作られ、これ以降における朝鮮語の変遷が明確となる。朝鮮語史の時代区分において、このハングル創制以降、16世紀末までは、中期朝鮮語（中期語、後期中世語）と呼ばれるが、この中期語は、近世（近代）語、現代語への歴史をたどる出発点となるだけではなく、中期語以前の姿を遡るための基礎となるものである。朝鮮語の歴史は、この中期語の確実な研究の上に基礎づけられるといっても過言ではない。本稿は、中期語および近世（近代）語における基礎語彙を記述する研究の一環として、中期語における身体語およびそれに関連する語彙の蒐集と整理を図ったものである。基礎語彙の選定にあつては、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「言語調査票2000年版」^註に基づいた。この調査票には2000語余りの基礎的な語彙（調査項目）が収録されており、そのうち、通し番号で1～47に当る項目が身体に関する語彙となっている。基礎語彙とは何かというのは難しい問題であるが、本稿では、便宜的にこの調査票の調査項目（1～47）を見出し語として採用し、これに該当する中期語の語彙を蒐集、整理し、用例と訳・注を付した。さらに関連する中期語の語彙も追加した。用例は、初出文献からの例を原則とし、従来の辞書に挙げていない例も出来るだけ取り入れた。したがって、用例の出典は、多くが15世紀のものとなっている。また、いわゆる「朝鮮・日本資料」に該当する語彙がある場合には、日朝言語交渉史の観点から（初出でなくても）その用例も追加することとした。本稿では、中期語を記した文献としては最末期となるが、仮名書き朝鮮語の資料である『高麗詞之事』所収の身体語彙（仮名書き）を付け加えた（志部昭平(1988)『陰徳記 高麗詞之事について—文禄慶長の役における仮名書き朝鮮語資料—』『朝鮮学報』128）。また、中期語で確認された語彙は、全てアクセント（傍点）を付した（L：平、H：去、R：上）（アクセントの交替形はカッコで示す。関連語のアクセントについては部分的に한글학회(1992)等の表記に拠る）。

本来は、各語の意味の分析や類義語間の差異などを記述すべきではあるが、今回は、一部を除き、語彙の蒐集と整理にとどめた。なお、現代朝鮮語における基礎語彙の記述にあつては、『現代朝鮮語基礎語彙集』（梅田博之(1971)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）のすぐれた研究があり、本稿の作成にあつても、この基礎語彙研究を参照した。各項目において、現代語の掲出語はこれによるものである（〈現〉として項目番号と代表的な語形を挙げた）。

以下で引用した中期語の文献名を、略称とともに年代順に挙げておく（刊年については福井玲（2013）『韓国語音韻史の探求』（三省堂）第12章による）。

訓民正音（解例本）（1446）《訓民（解例）》；龍飛御天歌（1447）《龍飛》；訓民正音（諺解本）（1447?）《訓民（諺解）》；釋譜詳節（1447）《釈詳》；月印千江之曲（1447）《月曲》；月印釋譜（1459）《月釈》；楞嚴經諺解（1461乙亥字本、1462木版本）《楞嚴》；法華經諺解（1463）《法華》；禪宗永嘉集諺解（1464）《永嘉》；救急方諺解（1466）《救急》；蒙山和

尚法語略録諺解(刊經都監版他)(1467)《蒙山》;内訓(1475)《内訓》;杜詩諺解(1481)《杜詩》;三綱行實圖(1481)《三綱》;金剛經三家解諺解(1482)《金三》;南明集諺解(1482)《南明》;佛頂心陀羅尼經諺解(1485)《仏頂》;救急簡易方諺解(1489)《救簡》;四声通解(1517)《四声》;翻譯朴通事(1517頃)《翻朴》;翻譯小學(1518)《翻小》;訓蒙字會(叡山本)(1527)《訓蒙》;小學諺解(宣祖版)(1588年)《小学》;高麗詞之事(内容は16世紀末)《高麗》(引用の張数の後のa, bはそれぞれ表、裏を示す)

また、参照した主要な古語辞典は以下の通り。

南廣祐(1999)『教學 古語辭典』教學社

劉昌惇(1979⁴)『李朝語辭典』延世大學出版部

한글학회(1992)『우리말 큰 사전 4 옛말과 이두』어문각

注) http://www.aa.tufts.ac.jp/~mmine/kiki_gen/query/aaquery-1.htm

中期朝鮮語基礎語彙：身体部

1. 頭(あたま) head <現1. 머리>

머리[LH] 『盖天 英氣실적 이바디에 머리를 좇스뵈니 (當宴敬禮) ((太宗が) 蓋天の英氣でいらっしゃるので(使臣は) 宴で(太宗に) 頭をお下げした。)>《龍飛9-49a》

마리[LH] 『스四해入물 이어 오나날 마리에 붓습고 태太子를 세스뵈시니 (四海の水を(頂に) 載せて来たので頭に注ぎ奉り太子をお立て申し上げた(立太子の灌頂))>《月曲 其34》

注: 머리と마리는母音調和による交替形。머리、마리는「頭髮」の意味で使われることもある(参照 2 髪、髪の毛)。마리는「頭髮」の意での使用が多い(参照; 南星祐(1986)『十五世紀國語의 同義語研究』塔出版社)。なお、마리는詩歌を数える単位「一首」にも用いる。

머릿바기[LHLH] 『머릿바기며 늑스식며 骨髓머...도라호야도 (誰かが) 頭であれ腫であれ脳髓であれ...求めても>《月積1-13a》(原文「頭目髓腦」(『過去現在因果經』))

【関連語】(머릿)뎡바기[(LH)HLL](頭の)頂; (머릿)뒤골[(LH)LL]頭蓋骨、(頭); 머리맡[LHL]枕元; 머리알뺨병[LHLHR]頭痛; 머리데[LHH]頭の形(様子); 머릿뽕[LHH]頭の垢; 머릿조조리[LHLLL](一種の)冠; 골치[HH]脳; 뽕머리[HLH]船首、へさき; 쇠머리[RLH]牛の頭; 웃머리[LLH]かしら(長), 上の方

2. 髪(かみ) 髪(の毛) hair <現1-1. 머리, 머리카락, 머리털>

머리[LH] 『부테 阿難일 시기샤 羅睺羅의 머리 갓기시니 녀느 쉰 아히도 다 出家키니라 (仏が阿難をして羅睺羅の頭(髪)をお剃らせになると他の五十人の子供もみな出家したのだ)>《釈詳 6-10a》

보리(ホリ)(髪)>《高麗028》; 호리 바へ라(髪結へ)>《高麗223》

마리[LH] 『부테 마리와 손톱과를 바혀 주신대 (仏が髪と爪とを切ってお与えになったが)>《釈詳 6-44b》 (注: この例は下記터리의《月曲》例と対応する文)

注: 머리,마리는「頭」も意味する(参照1)。また、마리는、糸を数える場合にも使われる。

머리터럭[LHLL] / 머릿터럭[LHLL]

머리터럭[LHLL] 『髮은 머리터러기라 (髪はかみの毛である)>《月積10-104b》

머릿터럭[LHLL] 『흔날 머릿터러글 모든 하늘히 얻즈바(一本の髪の毛を諸天がいただいて)>《月曲 其91》

머리터리[LHLH]/머릿터리[LHLH]

머리터리[LHLH] 『센 머리터리 저근 거슬 새려 시수니(白髮少新洗) (白髮が少ないのを新たに洗うと)』《杜諺23-47a》

머릿터리[LHLH] 『머릿터리 귀오 아히를 불러 혀 이페 드료니(握髮呼児延入戸) (髪をつかんで子供を呼び戸内に引入れると)』《杜諺 16-32a》

머리털[LHL] 『머리털 거두기를 드리디우게 말며 (髮の毛を集めたのを垂らす(髭にする)なかれ)』《小学3-9b・10a》

터럭[LL] 『흔 날 터럭 쑤늘 공供양養 공功득德에 닳涅뎡槃을 득득기야니 (一本の髮の毛だけでも供養の功德で涅槃を得るが)』《月曲 其92 (月積4-52b)》

터리[LH] 『툽과 터리를 바다 마초스븄니 (爪と髮の毛を受取り大切にお収めしていた)』《月曲 其174》(上記 마리의例と対応する文)

参照 42毛

【関連語】 머리 굶다[LHL-]髪を洗う; 머리 꺾다[LHL-]禿げる; 머리엿니頭虱[LLHH]

3. 額 (ひたい) forehead <現2. 이마>

니망[LH] 『니마히 넓고 平正하야 사랴미 相이 ㄴ고 (額が広く平らで人の相が備わっており)』《釈詳19-7b》

4. 眉 (まゆ)、眉毛 (まゆげ) eyebrow <現4. 눈썹>

눈썹[LL] 『賓頭盧 | 소노로 눈서블 들오 (賓頭盧が手で眉を挙げて)』《釈詳24-44b》

눈썹[LL] 『눈썹이 길에 당슈홈을 萬年을 하야 (眉が長く長寿万年して)』《小学3-20a》
즈운즈브 (睫) 《高麗029》(注: 즈운は눈)

【関連語】 눈살[HH]/눈썹[HH]まつげ (注: 살[H]矢、幅)

5. 目 (め) eye <現3. 눈>

눈[H]/[L] 『먼萬리里 외外人 일이시나 눈에 보논가 너기스븄쇼셔 (万里の外のことであるが目に見えているように思われますように)』《月曲 其2》

즈운 (目) 《高麗021》

【関連語】 눈두베/ 눈두에[LLR] まぶた (cf. 둥다[L-]覆う); 눈부터[LLL]ひとみ (cf. 부터[LL]ほとけ); 눈망울/눈망울/눈마울[LLH]めだま; 눈시울/눈시울[LLH]まぶた (cf. 시울[LH]絃(ゆみづる、(樂器の)いと)、시웁[LH] (絃、へり); 눈즈스/눈즈스/눈즈스/눈즈스/눈즈스[LLH(HLH)]ひとみ (眼睛) (cf. 즈스[LH]核)

6. 涙 (なみだ) tear <現5. 눈물>

눈물[HH]/ 눈물[HH]/ 눈물[HH]

눈물[HH] 『아바님 이받즈불 제 어마님 그리신 눈믈를 左右 | 하스바(憶母悲涕) (お父様が宴を催す時お母様を憶われた涙を左右が讒訴して)』《龍飛 第91章》

눈물[HH] 『帝釋이 그 눈물로 마르미 드외야 흐르게 하니라 (帝釈がその涙をもって河となして流したのである)』《釈詳23-28b》

눈물[HH] 『淚 눈물 류』《訓蒙上15b》

7. 耳 (みみ) ear <現8. 귀>

귀[H]/([L]) 諸天ハ귀와 迦葉의 弟子들히 귀를 마리여 더 모딘 比丘의 말을 묻 듣게 히시고 (諸天の耳と迦葉の弟子達の耳をふさいで、かの邪惡な比丘の言葉を聞けないようにされて) 《釈詳23-42a》

クイ (耳) 《高麗027》

【関連語】 귀밀/구밀/구민[LL]耳ぎわ・頬ひげ (16参照) ; 귀구무[HLL]耳の穴; 귀바회[HLH] 耳朶; 귀밥[HH]耳たぶ

注: 上掲のように複合語の場合に구という交替形が見られる。

8. 鼻 (はな) nose <現7. 코>

공[H]/([L]) 高히 길으 높고 고드며 (鼻が長く高くまっすぐで) 《釈詳19-7b》

코[H] 귀와 눈과 코와 입과 마음의 알음과 온갖 얼굴로 히요곰 (耳と目と鼻と口と心の知とさまざまな形をして) 《小学3-7a》

コウ (鼻) 《高麗022》

注: 공>코; 공(코)[H/(L)]は鼻水(汁)も意味する。

【関連語】 코구무[HLL] (코골) 鼻の穴; 코마르[HLL]鼻筋; 코물[LH/HH]鼻水(汁); 코리투(鼻穴)(?)《高麗023》

9. 口 (くち) mouth <現10. 입>

입[H]/([L]) 마흔 사스미 등과 도즈기 입과 눈과 遮陽기 세 쥐 네도 잇더신가 (四十頭の鹿の背と賊の口と目とひさしの三匹の鼠、(このようなことは) 古にもあったか(なかった))《龍飛 第88章》; 이베 도흔 차반 먹고(口に良い食べ物を食べ)《月積1-32a [L]の例》

エフ (イフ?) (口) 《高麗024》

【関連語】 입거웃/입거웃(있거웃)[LLH]口ひげ; 입젓/입젓[HH]口訣; 입김(있김)[HR]息; 입내[HH]口臭; 입노릇[HLH]口をもぐもぐ動かすこと; 입모숨[LLH]口吻; 입벼우다[HLH/(L)-] 唾となる; 입시울[LLH]唇 (10参照); 입아귀[LLH]口角; 입 힐후다[HLH]言い争う; 입힐힘[HLH]言い争い

10. 唇 (くちびる) lip <現11. 입술>

입시울[LLH] (시울[LH]絃(ゆみづる、(樂器の)いと)、시웁[LH] (絃、ふち) 長常 病き야시드러 음담 묻히고 모기며 입시우리 내몰라 ((像法が行われている時…)つねに病となり衰え飲食できず、喉や唇が干涸らび)《釈詳9-29b》

【関連語】 입시울소리 [LLHLH]唇音; 입시울가비야쁜소리 [LLHLHLHLH]輕唇音(唇輕音)

11. 舌 (した) tongue <現12. 혀>

혀[H] 諸根은 여러 불휘니 눈과 귀와 고와 혀와 몸과 뜰패라(諸根はもろもろのね(根)であり、眼と耳と鼻と舌と身と意とである)《釈詳6-28b》

セイ (舌) 《高麗026》(口蓋化した形)

【関連語】 혀글[HH]舌さき(舌頭); 혀불휘[HLH]舌根、舌の付根; 혀쇠[HH]弾き金(雀舌児);

혀소리 [HLH]舌音; 혀 츠다[HH-]舌打する;

12. 唾(つば) spit <現15. 침>

침[H] 『처엄 衿물와 침과부터 이마티 다 땀과 精과 피와 大小便利 몃 가온디 헛도는 므크 性이 헛 가진 들 보아 (初めに涙と唾(と)からこのように全て汗と精と血と大小便利(までが)身中を廻る水の性と同じであるのを見て)(初從涕唾)《楞嚴經5-63a(乙亥字本); 72a(木版本)》
注: 침[H]は「涎(よだれ)」も意味する。

【関連語】 침 발다[HL-]唾を吐く; 마래침[HLH]たん(痰)

13. 齒(は) tooth /teeth <現14. 이>

니[H] 『齒는 니라 (齒は「は」である)《訓民(諺解)6b》『니 검디 아니함며 누르며 성기디 아니함며 이저디며 썩든디 아니함며 그르 나며 굽디 아니함며(齒が黒くなく、黄色かったり疎らであったりすることなく、欠ていたり抜け落ちていたりすることなく、誤って出たり曲がっていたりすることなく)《釈詳19-6b》

치(齒)《高麗025》

【関連語】 닳뜨움[HLL/LLL]/닳뜨음[HLL]/닳뜨임[LLL]はぐき(齒茎); 닳땀[HH]齒の隙間; 닳삿/닛삿[HH]齒の間; 니소리[HLH]齒音; 닳스시[LLH]齒の間; 니 골다[HL-]齒が生え変わる; 앞니[LH]前齒; 엄니[RH]奥齒(注: 엄[R]きば(牙)、(め(芽))

14. 顎(あご) chin <現21. 턱>

턱[H](/[L]) 『中聲・如舌爲頤(中聲・は例えば舌頤である)《訓民(解例)25a》『如意는 턱개 이 구스리잇느니라:如意는頤有此珠는니라(如意は頤(くち)に此の珠があるのだ)《法華1-52a》
注:《釈詳詳節》では、上記『法華經』の部分は머개[LL](のどくび、くち?)を使っている。

『如意는 머개예如意珠 이실씨라(如意は口に如意珠があることである)《釈詳13-11a》

【関連語】 머개[LL]、턱[L]のど、くび(18,19参照)

15. 頬(ほお) cheek <現23. 뺨, 볼>

볼[H] 『보리 方正호사 獅子. 양 마득시며 (頬がきれいでいらっしゃり獅子の姿のようであられ)《月釈2-40b》(三十二相:頬車如師子)

뺨[H] 『또 巴豆入毒을 마자 그證이 이비 마르고 두 싸미 붉고 (其證口渴兩臉赤) (また巴豆の毒に当り(마자; 原漢文「解」)、その證は口が乾き兩頬が赤く)《救急 下50a》

注: 뺨[H]は頬の上部あるいは顔面を指すか。

【関連語】 보조개[RRH]えくぼ、ほお

16. 髭(ひげ) moustache, beard, whiskers <現24. 수염, 엄>

거웃[LH] 『髭거웃 在 唇(くちひげ)《訓蒙上14b》『髭거웃 엄 在 頰, 髭髻屬腎 女與閨人無腎故 無髭髻 (ほおひげ、髭髻は腎に属す、女と閨人に腎なきが故に髭髻なし)《訓蒙上14b》

注: 거웃[LH]は「鬚根(ひげね)」も意味する(《救急 上57a》)

입거웃/입거웃/입거웃 [LLH] 『賓頭盧 머리며 입거우지 조히 히오 辟支佛 양지러니 (賓頭盧は頭やひげが清らかに白く辟支佛のような姿であった)《釈詳24-44a》『鬚입거웃 슈 在 頤 (あ

고히げ) 《訓蒙上14b》

날웃[LH] ¶그 몬누의 병히엿거든 반드시 친히 불 디더 죽을 글히더니 브레 날오지 븐거늘 (其姊病必親爲然火煮粥、火焚其鬚) (その長姉が病氣だと必ず自ら火をたき粥を煮たが、火に鬚が付いたので) 《翻小9-(78b)79a》

달카우(鬚) (<날거웃?) 《高麗030》

【関連語】귀민터리[LLLH](頬ひげ・もみあげ、鬚毛) <귀밀[LL](耳ぎわ) +터리[LH]毛

귀밀[LL]だけでも鬚毛を意味する。また、귀민터리,귀밀は구민터리[LLLH],구밀[LL],구민[LL]という形でも現れる。参照 7耳

17. 顔(かお) face <現22. 얼굴,낯>

낯/낯 [L] ¶城 우회 닐흔 살 쏘샤 닐흐니 ㄴ치 맞거늘 (維城之上矢七十射中七十面) (城の上で七十本の矢を射られ七十人の顔に当たったので) 《龍飛 第40章》

注：現代語の「顔」にあたる얼굴[LL]は中期語では「すがた、かたち」を意味する。¶얼굴 뵈거시 光明 맞나아 (形あるものが光明に会い(受け)) 《釈詳23-9b》

【関連語】낯갓[LL]面の皮; 낯궤/낯궤/낯궤[LL]顔色; 낯양조[LLH]顔貌; 낯 불기다[LLL-] 赤面する; 낯 설다[LR-] 見慣れない

18. 首(くび) neck <現25. 목, 고개>

목[L] ¶존尊者者入머리에 연자늘 신神通通특力으로 모굴 구디 댈니 (尊者の頭に(花鬘を)載せると(尊者は)神通力で首を固く絞めた) 《月曲 其76》

注：목[L]は 19 (喉のど) も意味する

먹[L]¶臨濟 | 禪床이 ㄴ려 먹 잡고 니르샤디 (臨濟が禪床に下って首を捉えて曰く) 《南明 下 16b》

【関連語】목 띠아돌다[LLHH-] 縊れる; 목뼈[LR](목당뼈)首の骨; 밧목[LL]足首; 손목[LL]手首

19. 喉(のど) throat <現26. 목, 목구멍, 숨통>

목[L] ¶(八功德水는) 머금제 비 골품과 목 들름과 一切엿 시르미 다 업스며 (八功德水は) 飲むと飢えと喉の渇きと一切の憂いが全てなくなり) 《月積 2-42a》

注：목[L]は 18 (首) も意味する。

머개[LL]¶如意는 머개에 如意珠 이실씨라 (如意は口に如意珠があることである：如意迦樓羅王の注釈) 《釈詳13-11a》 (<くち?) (14 (顎) 参照)

목구무/목우무[LLL] (구무[LL]穴) ¶ 목 아래 목구무 마즌 디 혼 붓글 짝을 밀 닛만 호야 쓰라 (喉下當咽管口灸一壯如麥粒大) (首の下の喉に当る処に一壯(回)もぐさを麦粒大で灸せよ) 《救簡2-72a》

보(ボク?) (顎) 《高麗040》 ; 모크 (<くび) 《高麗353》

【関連語】목땀[LL]喉の病氣 (cf. 입땀口の病、惡阻) ; 목소리[LLH]声; 목숨[LR]命; 목젓/목젓[LH]のどひこ(口蓋垂); 목메다[LL-,LR-]/목머이다[H(L)LH-]のどを詰まらせる/목머다[RL-]のどが詰まる; 된목[RL]大声

20. 肩(かた) shoulder <現27. 어깨>

《高麗127》

【関連語】빅 골브다/빅 골브[HLL-]腹がすいている；빅 굶다[HL-]腹をすかす；빅 부르다[HLL-]腹いっぱい；빋기[H(L)/LH]下腹；빋바당[HLH]腹（面）；빋복[HH(L)/LL]臍(27)；빅브르/빅브르[HLL](副)腹いっぱい；빋습/빅습/빅습[HR]腹の中；빅습/빅습[LL]はらわた,内(습[H]肉)；빅알히[HLH]腹痛；허뻗빅[LHH]ふくらはぎ；허뻗[LH]下腿、ふくらはぎ
cf. 빅다[L-]みごもる、はらむ

27. 臍（へそ）navel <現39. 배꼽>

빋복[HH(L)/LL]¶十方애 一切佛이 빋보마로 放光키사 이 東山애 비췌더시니（十方にある一切仏が臍より放光し、この東山に映じた）《月积2-29b》（臍中放光《积迦善卷1》）

注：初期の文献には[HH,HL]が見えるが（《月积》[HH]；《永嘉》《楞嚴》[HL]）、[LL]が一般的となる。なお、빋복は植物の「臍」も意味する（《救急上38b》）。

28. 腕（うで）arm <現28. 팔, 팔뚝>

븨[L]¶曰如聶為臂（曰は例えば聶臂である）《訓民（解例）24b》 ¶그저긔 世尊이 金棺로셔 金色 븨홀 내바드샤 阿難이더려 무르샤디（そのとき世尊が金棺より金色の腕を押し出されて阿難に尋ねられるに）《月积23-39a》

븨[L]¶이 구스른 내 홀히 뵈엿던 거시러니（この珠は我が腕にかけていたものだ（此珠妾之繫臂也））《内3-38a》

注：中期語初期の文献では븨[L]、その後븨[L]が一般的となる。

븨톡/븨톡/븨톡[LH] うで(ひじ)

븨톡[LH]¶（五體投地는...）두 무릅과 두 븨톡과 덩바기 싸해 다드를 씨라.（五體投地は...）兩膝と兩臂と（頭）頂が地面につくことである）《月积21-7b》

븨톡[LH]¶ 膊 肩胛...今俗呼肱-븨톡 《四声 下36a》

븨톡[LH]¶肱 今俗-膊 븨톡《四声 上61b》

注：《四声通解》には同一の漢語（肱膊=肱膊うで）に븨톡と븨톡を当てている（但し本書は重刊本）

クビ ハルトウ（腕）（クビ？）《高麗037》

【関連語】븨/븨뎡긔다[LRL]拱く；븨쇠[LL]/븨쇠/븨쇠[LH]腕輪（쇠[H]てつ、かね）；븨지[LH]ゆごて（犇）；올흔븨[LLL]；올흔븨[HHL]右腕（《小学4-33b》）；

29. 肘（ひじ）elbow <現29. 팔꿈치>

븨구브령[LLLL] ¶肘븨구브령 두 《訓蒙上13b》(cf.구블[LH]腿(もも・すね)<굽다曲げ/がる)

븨톡마딕[LHLL] ¶노호로 두 븨톡마딕 그를 마르 견조고（縄で兩ひじの端を横にはかり）《救簡2-61a》

【関連語】븨톡/븨톡/븨톡[LH] うで(ひじ) 28 腕 参照；구블[LH]腿(もも・すね)

cf. 𑖦𑖫𑖪𑖫𑖪[RLH/RRHH]かかと；𑖦𑖫𑖪𑖫𑖪[RLH]くるぶし

30. 手（て）hand <現30. 손>

손[H(L)]¶入如손為手（入は例えば손手である）《訓民（解例）25a》 ¶물 우헛 대비물 혼 소노로

티시며 싸호는 한 쇼를 두 소내 자보시며 (馬の上にいる大虎を片手で打ちになり、闘う大きい牛を両手にお掴みになり) 《龍飛 87章》

손 (手) 《高麗031》

注: 손[H]は碁、将棋の「手 (打つこと)」も意味する。

【関連語】 손가락/손가락/손마락[LLL]手の指; 손잡[HR]手あか(手沢); 손금/손금[HH]手筋; 손도오리[HLHH]手助け; 손목/손목[LL]手首; 손발[HH]手足; 손발가락[HLL]手足の指; 손쥔[HL]手の甲; 손싸당[LLH]/손바당[L(/H)LH]手のひら; 손바닥[LLH]手のひら; 손소[HL(/H)]/손조[HH(/L)]手ずから; 손톱[HH]/손톱[LL]/손톱[LL]爪; 손고초다[HLH-]拱く; 손 고피다[HLH-]指折る; 손 벽티다[HHH-]手を叩く; 손 쟁다[HL-]争う (交手); 올흔손[HLH]右手 参考: 쇠손[HH] (鉄製の鎧); 흥손[LH] (鎧こて(朽))

31. 指 (ゆび) finger <現31. 손가락(手の指); 발가락(足の指)> 1

가락[LL]『그제 王子 | 또 네 가라글 드니 四倍 코젓 프디러니 (その時、王子が又四本の指を挙げたが (それは) 四倍 (の供養を) しようとする意であったので) 《月釈25-125b》

카라 (指) 《高麗032,034,035,036》

손가락/ 손가락/ 손마락 [LLL]手の指

손가락[LLL]『耶舍尊者를 命키야 손가락을 펴야 八萬四千 가라래 放光케 하고 ((阿育王は) 耶舍尊者に命じて (手) 指を広げ八万四千筋を放光させ) 《釈譜24-24b》

손가락[LLL]『손가락 사시에서 ((世尊の) 指の間から) 《月釈7-38b》

손마락[LLL]『손마락만큰 즈타날 덩즈에 (指頭大の紫玉の冠帽飾りに) 《翻朴 上29b》

밧가락[L(/H)LL]/ 밧가락[HLL]/ 밧마락[LLL]足の指

밧가락[L(/H)LL]『神足이 第一이니 밧가라마로 싸흔 눌러도 싸히 드리치며 ((大目捷連は) 神足が第一で、足の指で地を押しても地が振え動き) 《釈詳24-38a》

밧가락[HLL]『고개에 다드라 밧가락을 츠고 (嶺に至って足指を蹴って) 《南明上50a》

밧마락[LLL]『다섯 밧마락 가진 썬 업슨 룡을 (五つの爪をもった角のない龍を) 《翻朴上14b》

【関連語】 손발가락[HLL]手足の指; 엄지가락/엄지가락[LHLL]親指; 람지손카라 (大指) 《高麗032》; 치그그와라 (?) (人サシ指) 《高麗033》; 가온뎡가락[傍点欠損](手)中指(《救簡2-41b》); 치크 손카라 (中指) (?) 《高麗034》; 치그손카라 (?) (無名指) 《高麗035》; 사키손카라 (小指) 《高麗036》

엄지밧가락[LHLL]足の親指; 어이밧가락[LHLL]足の親指(어이~어시[LH]親); 샷기밧가락[LHLL]足の小指

32. 爪 (つめ) [人、動物の] nail <現32. 손톱(手の爪); 발톱 (足の爪)>

톱[H] 『三藐三佛陀 | 어시니 혼 터럭 혼 토빈돌 供養功德이 어느 굴 이시리. ((今世尊は) 三藐三仏陀でいらっしやるので一本の髪、一つの爪でも供養の功德がどうして限りがあるまいか) 《月曲 其92》

가락톱[LLH] (手の) 爪 『가락토보로 그려 (爪で書き) (以指爪甲으로而畫) 《法華1-219b》

손톱[HH/LL]/ 손톱[LL] 手の爪

손톱[HH/LL]『부테 마리와 손톱과를 바혀 (仏が髪の毛と手の爪とを切って) 《釈詳6-44b》

손톱[LL]『고깃 양이 두 손톱 相을 取키려 (肉の形が二つの(手の)爪の相を取ろうか) 《楞嚴

3-43b》

밧뚝[HH]/ 밧뚝[LL]足の爪

밧뚝[HH] ㅍ시혹 밧뚝도 또 ㅎ리라 (或は足の爪も亦(治すのに)いいだろう) 《救方 上49a》

밧뚝[LL] ㅍㅎ다가 大地로 밧뚝 우희 연저 (若以大地置足甲上) (もし大地をもって足の爪の上に置き) 《法華 4-143a》

엄지가락뚝[LHLLH]足の親指の爪 ㅍ두 발엄지가락 뚝 뚝 털 난 짜홀 열네 붓곰 쭈딕 (灸足兩大拇趾上甲後聚毛中各十四壯) (兩足の親指の爪の後の毛の生えたところを十四回ずつ灸を据えるに) 《救方 上20b》

参考: 뚝[H]鋸 (のこぎり)

33. 足(あし) leg /foot <現44. 脚 leg 다리; 45. 足 foot 발>

다리[LL] 脚 leg ㅍ각시들히 다리 드러 내오 손발 퍼 버리고 주근 것마티 그우드러 이셔 (女達が脚を露にし、手足を広げ、死んだように転げ落ちており) 《釈詳3-25b》

注: 次項발に比して用例は少ない。

【関連語】 구불[LH]腿(もも・すね); 허뿔[LH]下腿、ふくらはぎ

발[H(L)]足 foot ㅍ발 업슨 것과 두 발 툰 것과 네 발 툰 것과 발 한 것과 이러 툷홀 衆生들홀…金銀…樓閣들홀 주어 (足のないもの、二つの足のあるもの、四つの足のあるもの、足の多いもの、このような衆生達を(に)…金銀…樓閣を与え) 《釈詳19-2b》 (발[L]부텃마·래(仏の脚に) 《釈詳13-11b》

ヒヤラ(足) (?) 《高麗038》

注: 발は、(山の)裾、物の脚、雨脚も指す。

【関連語】 以下の関連語にあるように、複合語になると밧となることがある。

밧가락[HLL]/밧가락[HLL]/밧마락[LLL]足の指; 엄지밧가락[LHHLL]/어이밧가락[LHHLL](어이~어시[LH]親)足の親指; 밧가락[LHHLL]足の小指; 샷기밧뚝[HH]/밧뚝[LL]足の爪; 밧귀머리[HRLH]/밧귀머리[LRLH]/밧뿔측[HHH]/밧측[HH]かかと(くるぶし)(귀머리[RLH]踵・肘・踝); 밧목[LL]足首; 밧둥[HL]足の甲; 밧바당[HLH(L)]/밧바당[LLH]足の裏; 밧근[HH]足先; 밧자취[HLH]足跡; 밧발[HH]雨脚; 손발[HH]手足

34. 膝(ひざ) knee <現43. 무릎>

무릎[LL] ㅍ올흔 무릎 꾸러 몸 구퍼 合掌ㅎ야 (右の膝を屈し身をかがめて合掌し) 《釈詳9-29b》

무릎[LL] ㅍ무로피어나 소니어나 오스로 두터이 싸 (膝や手を衣服で厚く包み) 《救簡 1-59b》

【関連語】 무릎도리[LLLH]무릎도리[LLH]膝欄(衣類の一); 쇠무릎[RLL](牛膝:いのこずち); 오곰[LH] ひかがみ(膕)

35. 肝臟(かんぞう) liver <現38. 간, 간장>

간[R](漢語) ㅍ 또 닭의 간과 피를 나취 버리고 지를 마쉬 횃두로 쉼라 두면 즉재 살리라 (また鶏の肝と血を顔に塗り灰をあたり一面に敷けばすぐに助かるだろう) 《救簡1-44b》 ㅍ肝 간 간俗稱一花《訓蒙上14a》

36. 心臟(しんぞう) heart <現35. 심장, 염통>

럼통[LL] ㄱ도흔 주사를 하나 저그나 마느리 마라 도틱 럼통엿 피로 골오 섯거 (好い辰砂を多少 (いくらか) 細かく挽いて豚の心臓にある血と等しく混ぜ) 《救簡1-97a》

념통[LL] ㄱ心 념통 심 又稱ㅁ슴 심《訓蒙上14a》

ㅁ슴 [LL] ㄱ리를 뵈고 ㅁ슴물 싸혀 내야 鬼神을 이바드며 (腹を裂き心臓を抜き出して鬼神に供え) 《月積23-73b (1559年重刊本)》 注: ㅁ슴は「心」も意味する。

ㅁ슴쪽[LLL] / ㅁ슴족[LLL] ㄱ이 사르딕 ㅁ슴쁘괴 노코 (灰と浄土を混ぜた泥を) この人の心臓に置いて (쪽かけら、部分) 《仏頂31b》 ㄱㅁ슴조기 뵈여 (心臓が動き) 《蒙山7b》

37. 腸 (はらわた) guts <現37. 창자>

창자[HH] 漢語 [腸子] ㄱㅁ론 똥이 창자에 막달여 얼원거시 이셔 (乾いた便が腸に詰り固いのがあり) 《救簡3-73b》

애[R] ㄱ똥이 누르며 애 물어 피와 슬쾌 헤여디여 (背中が焦げ、腸が爛れ (爛腸하야) 血と肉とがくずれ) 《永嘉 上34b》

【関連語】 ㅁ슴/ㅁ슴[LL] はらわた, 内臓 (슴[H] 肉)

38. 皮膚、皮、肌 (히ふ、かわ、はだ) skin <現49. 살갓; 피부; 살; 살결>

슴[H] (肌、皮膚) ㄱ흙 벼른 디 뽕드로몬 갓과 슬히 살쥬미오 (泥塗地落은皮膚之皺皺 | 오) (土を塗ったところが剥け落ちるとは、皮と皮膚が皺になることであり) 《法華2-105b》

注: 슴[H]は46.肉も意味する。

갓[L] (皮膚) ㄱ갓과 슬쾌 보드랍고 (皮膚と肉とが柔らかく: 仏の三十二相の一) 《月積2-40b》

注: 갓[L]は動物の皮も意味する (열의 갓 狐の皮《訓民 解例18a》) cf. 갓 (木などの皮、表)

【関連語】 슬슴[HH]肌理; ㅁ갓[LL]面の皮

39. 汗 (あせ) sweat / perspiration <現51. 땀>

땀[H] ㄱ견 아래 땀 나며 (腋の下に汗が出て: 五衰の一) 《月積2-13b》

【関連語】 땀도야기/땀되야기[HLLH] あせも (cf. 되야기[LLH] 癩疹(麻疹)); 땀어치[HLH] (馬の汗受けの敷物; ㅁ땀[HH] 汗血)

40. 垢 (あか) filth / grime / dirt <現52. 때>

때[H] ㄱ須達이 지비 도라와 ㅁ든 옷 님고 (須達が家に帰り垢の付いた衣を着て) 《釈譜6-27a》

【関連語】 ㅁ 지다[HH-] 垢がつく; 손집[HR] 手垢、手沢

41. 膿 (のう、うみ) pus <現50. 고름>

고름[HH(L)/HR] ㄱ味에 브서 고름과 피왜 드외요몬 水 마슬조차 變호미라. (味に注いで膿と血とになるのは水の味をさえ変るのだ) 《楞嚴8-100a》

【関連語】 고름피[HLH] 膿血; ㅁ다[H/L]/ㅁ다[R] 膿む

42. 毛 (け) [人間の体毛] hair <現48. 털>

털리[LH] ㄱ모매 털리 나샤디 다 몽기시며 ... 모맷 털리 다 金入비치며 (体に毛が生えていらっしやるが全て丸まっており...体にある毛は全て金色であり) 《月積2-40b 32相》

터럭[LL]『閻浮提 마득흔 外道』흔 터럭 몬 무웁달 須達이 듣고 (閻浮提に満ち満ちた外道が一本の(足の)毛も動かさないのを須達が聞き)《月曲第156》

注1)：上記の《月曲第156》の흔 터럭 (一本の毛) は、《釈譜》の当該部分では、바랫 흔 터럭 (足にある毛) とある。『내 바랫 흔 터럭을 몬 무으리니 (不能動吾足上一毛) (私の足の1本の毛をも動かさないであろうが)、《釈譜6-27a》

注2)：터럭[LH]とは同義であるが、터럭[LH]のほうがずっと頻度が高い(南星祐上掲書46頁)。また터럭[LL]のほうが複合語や比喩的に用いられることが多くあるようである。これらは、また1「髪」の毛の意味でも用いられる。터럭[LL]のほうが古い語か。

털[L]『두 발 엄지가락 툼 뒤 털 난 짜흔(兩足の親指の後の毛が生えたところを)《救簡1-50a》

注：털[L]は、初期の文献には見られない。新しい語か。

【関連語】「髪」については、1 (頭)を参照；터럭구멍[LLLL]毛穴；터럭근[LLH/LHH]/터릿근[LHH]・털억근[LLH]毛先；터럭뼈[LLH]毛氈；터럭옷[LLH]毛皮の衣；털갓[LH]毛皮の帽子；소움터럭[LLLH]綿毛；귀밑터럭[LLLH]/귀터럭[HLH]鬢、頬ひげ

43. 脂、脂肪 (あぶら、しぼう) fat /grease <現78. 기름> (굳기름脂肪)

기름 / 기름 / 끼름[LH]『脂는 얼원 기르미오 腴는 기름진 고기라 (脂は凝固したあぶらで、腴はあぶらの多い肉である)《楞嚴6-85b(乙亥字本) / 99a (木版本)》

注：45の用例参照。また기름[LH]は油も意味する。

진기름[LHL]『마른 飲食과 진기름 진 거슬 머겨(與肥脂之物) (乾いた食べ物とあぶらがのったものを食べさせ)《救急上80a》 注：진肥えた

参考：키리미(油)《高麗100》；키린미 프리 세이라 (油トボセ)《高麗195》

【関連語】기름 지다[LHL-]脂肪が多い

44. 血 (ち) blood <現53. 피>

피[H]『몸에 필 피화 그르세 담아 남녀를 내스키니 ((菩薩の)身にある血を集め器に盛って男女をお作りした)《月曲上4》

【関連語】핏내[HH]血の臭い；핏무적[HLL]血の塊；피즙[HH]汗血；피싸움[HLH]血戦；핏줄[傍点欠落]血管

45. 骨 (ほね) bone <現54. 뼈>

뼈[H]『骨髓는 뼈 소개 잇는 기르미라 (骨髓は骨の中にあるあぶらである)《月積1-13a》

【関連語】뼈고도리[HLLH]骨製の矢尻；뼈근[HH]骨の先；고기뼈[LHH]魚の骨；마룻뼈[LLH]背骨

46. 肉 (にく) flesh <現55. 살, 근육; 고기 (食用としての肉)>

1

살[H]『肉은 살히라 (肉はにくである)《月積8-34a》

注：살[H]は「肌、皮膚」も意味する。38 (皮膚、皮、肌) 参照

【関連語】살지다/살찌다/살지다[HL]太る、太っている；빅살/빅살[LL]はらわた、内臓 (빅[H]腹)]

고기[LH]『머리며 누니며 손바다며 모랫 고기라도 비는 사름을 주리어니 ((布施として) 頭でも目でも手足でも体の肉でも乞う人に与えるのだから)《釈譜9-13a》

注：고기[LH]は魚（肉）も意味する。魚（肉）は、とくに몹고기[HLH]/뭇고기[HLH]/물고기[HLH]/몹국[HL]（水肉）ともいい、陸生動物の肉は、물고기[LLH]という。

【関連語】고깃국[LHL]肉羹(あつもの)；고깃즙/고기즙[LHH]肉汁；고기탕[LHR]臠(あつもの)；쇠고기[RLH]牛肉

47. 体、肉体（からだ、にくたい） body <現47. 몸>

몸[H(L)]『城 아래 닐흔 살 쏘샤 닐흐니 모미 맛거늘 京觀을 밍마르시니(城の下に 七十の矢を射られ七十の体に当たったので京觀（屍を積み重ねた塚）をつくられた)』《龍飛40章》

ボン（身）《039》

【関連語】몹골[HL]体つき；몹기리[HLH]身の丈；몸닷기[HLH]修身；몸소/몸소[HL(/H)]自ら；몸알리[HRL]知己；몸얼굴[HLL]体つき、すがた；몸채[HH]母屋；오른몸[LH(/L)H]/온몸[RH(/L)]全身；홀몸[LLH]独り身

【付記】本稿は平成26年度科学研究費補助金、基盤研究(C)(25370479)「朝鮮語古語辞典作成のための基礎的研究」による研究成果の一部である。